

田辺 理 特定准教授

Tadashi TANABE (Associate Professor)

研究課題：浄土教美術の起源と展開（Origin and Making of Pure Land Buddhist Art）

専門分野：ガンダーラ仏教美術史（History of Gandharan Art）

受入先部局：文学研究科（Graduate School of Letters）

前職の機関名：宝塚大学（Takarazuka University）



我国や中国で栄えた浄土教は、大乘仏教の最も著名な流派の一つです。最近の研究によれば、浄土教の思想は、紀元後1世紀頃に、クシャン朝下のパキスタン北西部のガンダーラにおいて出現したことが明らかとなっています。浄土教からは、阿弥陀仏の西方極楽浄土、阿閼仏の東方妙喜世界、弥勒仏の浄土などの仏国土が生まれました。これらの仏国土を表現した美術作品は浄土教美術と呼ばれ、幅広く研究が行われていますが、その起源については、未だ解明されていない大きな問題として、喫緊の研究対象となっています。これまで、私は、ガンダーラの仏教彫刻に見られる小乗部派仏教における来世観とその造形について研究してきました。白眉プロジェクトでは、その研究成果を生かして、ガンダーラの浄土教美術の起源と展開の解明を試みます。特に、ガンダーラの仏教彫刻に見られる生天思想の美術から浄土教美術の変遷に着目した研究を行います。

生天思想から仏国土の表現へ

ガンダーラの仏教美術はギリシア・ローマ美術、西アジアや中央アジアの美術、インドの仏教美術を折衷、混淆した美術です。特に、ガンダーラの仏教彫刻には、男女の飲酒饗宴のような、一見すると仏教とは関係ないと思われる図像が多く見られます。私は、一見非仏教的なものと思われるこのような図像が、仏教寺院に飾られていたのは、何らかの仏教的な意味を有するからであるとみなし、それらの図像は、死後、天界の楽園に生まれかわって快樂を得るという古代インド由来の生天思想の特徴を表現したものであると、仏典を用いて裏付けました（田辺 2019）。このガンダーラの仏教

Pure Land Buddhism that prevailed in China and Japan, is the most outstanding school of Mahayana Buddhism. According to recent researchers, it originated around first century AD in Gandhara located in the north-west of Pakistan then ruled by the Kushans. This Mahayana Pure Land Buddhism led to generate several celestial worlds: Western Pure Land of Amida-Buddha, Eastern Pure Land of Akṣobhya Buddha and Pure Land of Maitreya-Buddha. Although the art of Pure Land Buddhism has been extensively studied by many scholars, but the origin and the earliest phase of this art still remain to be clarified. Therefore, these matters appear to be solved urgently. Until now I have been engaged in studying Indian art of Hinaya Buddhism focusing on the afterlife of the Gandharan Buddhism and its artistic features. However, as my study for this project, I decided to take up Gandharan art of Pure Land Buddhism, and attempt to clarify its origin and development, making good use of my research achievement. I will focus especially on transformation from the art of rebirth in Realms of Desire to that in Pure Land.

彫刻を生天思想によって解釈した研究成果は、ガンダーラの仏教彫刻における来世観の造形表現の全体像を解明することに繋がりました。換言すると、生天思想から浄土思想への発展のプロセスであり、造形美術においては小乗部派仏教の欲界世界の表現から仏国土の表現への転換です。そこで、今後の研究は、以下の二つの具体的な問題を解決することを中心に取り組みます。その問題としては、（1）ガンダーラにおける生天思想とその美術の全貌が解明されていないこと、（2）ガンダーラの浄土教美術の起源と展開が未解明であることが挙げられます。

ガンダーラにおける生天思想の全貌の考察

ガンダーラには、天界の情景を表した図像として、兜率天上の弥勒菩薩を表したといわれている図像（図1）があります。弥勒菩薩は死後に兜率天に生まれ、その後56億7千万年後に、地上に降下して仏陀となります。この弥勒菩薩が兜率天において、死後生天してきた人々に説法をする場面を表したものが、兜率天上の弥勒菩薩の図像です。本研究では、本図を再考察し、これらの図像では、女性との飲酒饗宴などの場面が取り去られていることを明らかにします。そして、このようなガンダーラの兜率天上の弥勒菩薩像といわれる図像が、小乗部派仏教の生天思想の範疇に位置づけられ、それが生天思想を表現した図像から浄土教美術に至る過渡期的な存在であったことを解明します。

ガンダーラの浄土教美術の起源と展開

ガンダーラの「仏説法図」には、(a) モハメド・ナーリーの作例（図2）のように、説法する仏陀の周囲に多数の聖衆を表現した図像、(b) 仏とその左右に二菩薩を配する仏三尊像、(c) 楼閣内に仏三尊像と聖衆を表現した図像、(d) 禅定仏と多数の化仏よりなる図像の四種類があり、最近の研究ではそれらの全てが浄土教美術であると言われています。

本研究では、はじめに、(a) タイプの仏説法図の再検討を行います。この仏説法図は中心に仏陀を表し、その周囲に菩薩形などの様々な図像を表現しています。この図像については、これまで阿弥陀仏の西方極楽浄土、釈迦牟尼の仏国土、阿閼仏の妙喜世界など異論が多く、その解釈について未だ結論が出ていません。私は、美術史的な考察を先行し、仏説法図中に表された仏陀像、菩薩像、周囲の図像、建物、持物などの造形要素を詳細に分類整理して、仏説法図全体の構造の解明を行います。次に、仏典に記述された仏国土の世界の実相と仏説法図との比較考察を行います。このようにして、(a) タイプの仏説法図から考察を始め、その後に (b) から (d) までの「仏説法図」が、特定の仏国土の世界を表しているのか、もしくは、単に仏国土の世界一般を表しただけなのか、図像の意味を検討します。これらの図像の比定を行うことによって、仏国土の世界の造形が天女を排した禁欲的で清浄な世界を表現した図

像であることが明らかになります。

以上、生天思想から仏国土の世界へとガンダーラの仏教彫刻の図像が変遷したことに着目し、初期浄土教美術の起源を明らかにします。



図1 兜率天上の弥勒菩薩 東京国立博物館所蔵
cf. 宮治昭（監修・編集）『ガンダーラ美術とパーミヤン遺跡展』静岡新聞社（他）, 2007年, 図19.



図2 仏説法図 ラホール博物館所蔵 モハメド・ナーリー出土
cf. P. Cambon (ed.), *Pakistan, Terre de rencontre (1er - VIe siècle). Les arts du Gandhara*, Paris: Musée Guimet, 2010, fig. 75.

参考文献

田辺理「ガンダーラの仏教彫刻の人物葡萄唐草文の仏教的な意味についてーポストン美術館の作例をめぐってー」『國華』1482号、2019年、7-21頁。
宮治昭「舍衛城の神変」と大乘仏教美術の起源ー研究史と展望ー『美学美術史研究論集』第20号、2002年、1-27頁。